



であろう。左にもこれと対になる石灯籠があつたと思うが駐車場造成の時壊されたのではなかろうか。神仏混淆の思想の下では宝蔵院と愛宕神社は一緒だつた。

## 二 大泉寺

平成元年六月二十五日、大泉寺を訪ね、手洗石を見せていただき、ご住職に話を伺つた。

この水盤のある位置には元二階建の楼門があつた。その楼門の下にこの水盤があつた。裏面の銘に「龍山叟代」とあるが、この方は延享元年に没しているのでそれ以前の建立だろう。

さらに靈廟構内の浅野家臣供養塔へ案内していただき、説明を受けた。

浅野長政・幸長父子はもと甲斐の領主。朝鮮に出兵し、戦没した将士の靈を慰めるため、ここに供養塔を建てた。

## 三 教安寺

平成元年九月十九日、城東二丁目の教安寺を訪ね、まず層塔を拝見し、ご住職から次のような話を聞いた。

この塔の建立は大正五年六月五日

かつた。よほど基礎がしっかりしていだのだろう。お城の謝恩塔が建立されたところ、この塔も建てられた。この塔を建立した武井さん（当時穴山町の製糸工場主）という方は檀家ではないが、

元の教安寺跡に自宅を建てる時、工事中に石塔がたくさん出てきた。その供養という意味でこの塔を奉納された。さらに墓域に入つて案内してもらったのが、二代喜多嶋宗甫墓碑だった。私は「甲斐儒医列伝」のコピーを持参していたので、長崎で医学を勉強した」と話してくれた。

文化十年十一月の建立である。次いで家康の第八子「仙千代」の廟所の建立）を拝見し、ご住職の話を伺つた。

最後に「杉山先師之碑」を見せていただいた。ご住職の話は次の通りである。  
先師とは先の師匠または先生ということであり杉山先師は検校（盲人の指導者）だった。當時盲人に対する差別が甚だしかつたので、この人はこれら盲人を教安寺にかくまつた。従つて盲人たちが教安寺を慕つた。針の先達。銘によると五月二十八日が命日だが、毎年六月一日、盲人組合の人たちはここに墓参してから現在でも総会を開いている。明治二十六年二月建立。

名号塔も見せていただいた。ご住職の話は次の通りである。

甲府の大火で当寺が焼けた直後にこの塔が建立された。銘によれば「文政十三龍集庚寅夏六月造営」とある。この時の住職鏡誉上人は極めて信望の厚い人であった。それは銘にあるように

上州・豫州・濃州・三州・奥州・紀州・長州・能州と、遠路はるばる當時交通の便のなかつた所から馳せ参じているところからも分かる。なお木喰上人もこの建立の時立ち会つてゐる。

最後に「杉山先師之碑」を見せていただいた。ご住職の話は次の通りである。  
先師とは先の師匠または先生ということであり杉山先師は検校（盲人の指導者）だった。當時盲人に対する差別が甚だしかつたので、この人はこれら盲人を教安寺にかくまつた。従つて盲人たちが教安寺を慕つた。針の先達。銘によると五月二十八日が命日だが、毎年六月一日、盲人組合の人たちはここに墓参してから現在でも総会を開いている。明治二十六年二月建立。

#### 四 長禅寺

平成元年十月二日、愛宕町長禅寺を調査した。ご住職が案内してくれたのは「宮川實之墓」だった。「明治十六年九月」の銘がある。ご住職の話を次に記そう。

宮川實は山梨県内最初のキリスト教布教師だったが伝染病で死去した。當時どこの寺でもキリスト教布教師といふことで埋葬を拒否したが、この寺の当時の住職は、宗教は一つであるとう考へてこの人の埋葬を受け入れた。

五 柳小路の石祠

平成元年十一月七日、中央四丁目の柳小路にある軒唐様造りの石祠を見に行き、北村時計店主夫人より話を伺った。話は次の通り。

ここにはもと身延山祖師堂があつた。この堂は現在共栄石油の隣に移っている。その堂の石祠がこれだ。現在この石祠は火伏の神として柳小路飲食店街の守り神であり、毎年十月最終土曜に祭が行われている。

#### 六 高源寺

平成二年一月二十二日、高源寺にご住職の斎藤典男先生を訪ね、まず井戸の近くの

「水神塔」について話を伺つた。

これはこの井戸を掘つた時の神様。

この井戸もつぶしたいが、この塔があるのでそうもいかない。塔の左横にあらるのは梅の木で、この塔を建立する時に植えたもの。この塔もあるこの歌碑も無縁塔も、建てたのは井戸をつくり梅の木を植えたのと同じ、三十代住職で私の曾祖父の日遙上人。明治四十二年秋の建立。

先生の案内で高畑一丁目の元宮住吉神社へ行き、「天白大神」（文字塔）について説明してもらつた。

この天白神はもと旧高畑の最終地番のところにあったもの。明治三十八年の建立と銘にある。

次に目をひいたのが道祖神三基。ここでも先生に説明をいただいた。

故塩沢芳茂氏によれば、この三基の道祖神は別々の所にあつた。多分高畑の新しい土地の「北部」「村北」「中部」に分かれて祭られてきたものだろう。それが若者組（若い衆）の祭礼で喧嘩が激しかつたので、ここにまとめて

紙数の関係で他は割愛するが、地元の方や氏子さん、檀家さんから多くの話を伺つた。冬の空つ風に吹かれながら雪道の中を歩いたり、炎暑の中をブヨや藪つ蚊にくわながら採寸、筆写したりの石造物探訪だった。石造物を通して甲府の歴史を知りたいというのが私の狙いである。歩ける限りこれからも石造物聞きあるきを続けたい。（市史編さん事務局）